

差別と闘う吃音者運動の創出を！— 吃音者解放研究会の結成に向けて

今までの、吃音者の運動には「どもりは悪いもの、劣ったもの」というとらわれがつきまとっている。そしてそのことを何らかの形で問題にしたとしても、そのことを直接に取り上げ、対峙しえる、しようとする運動はなかった。

吃音者は差別に対して往々に無自覚的であり、更に吃音者に対する差別はたいしたことはないという根強い考えがある。

確かにその差別が他の障害者に比して、社会から隔離されることが少なく、「社会参加」ということに於いて絶対的に排除されることが少ないとは言える。だが問題は差別の形の違いだけである。吃音者は常に叱咤激励という形の差別を受けてきた。又性格が弱いからと、気持ちの持ちかたが悪いから云々と非難されて来た。我々が吃った時、向けられる笑いや強張った顔に我々がどれほど傷付いてきたか、そしてその予期一瞬差しの恐怖の中で、我々がいかに心理的葛藤に陥ってきたか、吃音者ならば十分理解できるはずである。

そのことに対して一体たいしたことはないと誰が言いえるのだろうか。差別に重い軽いはない、ただ排除の形の違いがあるだけである、隔離されるような、「社会参加」を拒否されるという絶対的排除の形をとるのか、一定「社会参加」を許された上で、非難をうけること、どちらが辛いのかというような比較は、肉体的苦痛と精神的苦痛はどちらが辛いのか、一発のストレートと十発のジャブはどちらが効き目があるかというような質問と同じである。

我々が傷付いた時、それを自分が悪いのだからと受け入れてしまい、それを差別としてとらえられない構造がある。

「どもりは悪いもの、劣ったもの」という意識が社会凡通的にあり、そのことに我々もとらわれている。そこから我々は掘り起こさねばならない。

我々はアメリカインディアンのある部族の話や文化の違いによる吃音の「許容度」の違いの話から、「吃音が何故問題的話行為として取り上げられるのか」と問いを発する。

吃音者の問題は関係性の問題であり、そのことを抜きにして一切の吃音—吃音者論は語れない。そして、敢えてそのようなところで語る時、吃音は吃音者諸個人の問題になり、「どもりは悪いもの劣ったもの」という意識に囚われていく。場（—「社会」）が吃音（者）を否定するとき、なぜ我々はそれを素直に受け入れて、自分を変えようとしなければならないのだろうか、なぜそれをごまかす技術を身につけなければならないのだろうか、なぜ否定されるのならば否定しかえそう、場を変革しようとしなければならないのだろうか。なぜ悲しみや苦しみを場を変えうる怒りへと転化しえないのであろうか。

それを個々の問題としてやれば「喧嘩」や「犯罪」にしかならなかった。そして「喧嘩をするにも力がある」。

我々は、吃音者の問題をバラバラの個々の問題としてとらえるのではなく、吃音者総体の被差別の問題としてとらえ、無自覚的な被差別の共同性を反差別の共同性として獲得し、運動の蓄積を、闘う理論の深化を獲得したい。それが「喧嘩」ができる力の獲得である。

そのことは他の障害者、他の被差別者との被差別の共感から新しい共同性、新しい社会を作り出していく共同の闘争に踏み出すことである。吃音者一障害者が新しい社会を作るのだ！

我々は誇りをもって吃音者であることを宣言する。「宣言」とは差別と闘うという宣言である。

「吃音の問題」それ自体がある訳ではなく、差別の問題としての「吃音者の問題」が在るだけである。

そして、「吃音者の問題」は他の様々の問題と絡み合い根源的に軌を一にしている。だから吃音がなくなったとしても、それでバラ色の人生が訪れる訳でなく、その軌を一にした別の個の問題が前面に出てくるだけである。

我々は「吃音ー吃音者とは？」と繰り返し問いを発し、吃音者問題の解決の道を、吃音者としての研ぎ澄まされた感性と共感を持って、求める。

今、ここから吃音者運動の新しい流れが流れ出る。共に集わん！